

# LABVIEW™ アプリケーションビルダ

## バージョン 6.0

LabVIEW アプリケーションビルダは、プログラムや LabVIEW との共有ライブラリ (DLL) の作成に使用するアドオンパッケージです。また、LabVIEW 開発ソフトウェアを使用しなくても、これらのプログラムや共有ライブラリを配布できます。実行可能ファイルの配布の使用許諾条件については、「LabVIEW ソフトウェアライセンス契約書」を参照してください。

これらのリリースノートにはインストール手順が含まれており、このバージョンのアプリケーションビルダを使用して作成されるアプリケーションのシステム条件について説明しています。アプリケーションビルダ 6.0 は LabVIEW 6.0 と一緒に使用する必要があります。

## 目次

---

必要なシステム構成 .....	2
UNIX .....	2
LabVIEW アプリケーションビルダのインストール .....	3
Windows.....	3
Macintosh.....	3
UNIX .....	4
アプリケーションビルダのインストールの確認 .....	4
アプリケーションビルダライブラリの変更内容 .....	5
バージョン 5.1.1 とバージョン 6.0 の間の変更内容 .....	5
バージョン 5.1 とバージョン 5.1.1 の間の変更内容 .....	5
バージョン 5.0 とバージョン 5.1 の間の変更内容 .....	6

# 必要なシステム構成

---

アプリケーションビルダを使用して作成するアプリケーションおよび共有ライブラリは、LabVIEW 開発システムとほとんど同じ条件が必要です。必要なメモリはアプリケーションまたは共有ライブラリの大きさによって異なります。アプリケーションおよび共有ライブラリは通常、開発システムで VI を実行するのに必要なメモリと同量のメモリを必要とします。

LabVIEW アプリケーションおよび共有ライブラリはテンポラリファイルの格納にディレクトリを使用します。大きいテンポラリファイルもあるので、このテンポラリディレクトリ用のディスク領域をメガバイト単位で確保することをお勧めします。**ツール » オプション**を選択すると、テンポラリディレクトリを参照したり変更できます。

アプリケーションまたは共有ライブラリが予期せずに中断された場合、テンポラリディレクトリ内のファイルは変更されません。ディスク領域を消費しないように古いファイルを削除してください。

## UNIX

フロントパネルを表示する LabVIEW アプリケーションおよび共有ライブラリには、OpenWindows 3、HP-VUE、X11R6 などの X Windows System サーバが必要です。LabVIEW では xlib を使用して独自のグラフィカルユーザインタフェース (GUI : Graphical User Interface) が作成されるので、LabVIEW アプリケーションおよび共有ライブラリには Motif や OpenLook などの GUI は不要です。

Sun 対応 LabVIEW アプリケーションビルダは Solaris 2.5.1 以降で動作します。HP-UX 対応の LabVIEW は HP-UX 10.20 以降の Hewlett-Packard Model 9000 Series 700 コンピュータ上で動作します。Linux 対応の LabVIEW は RedHat Linux 5.0 以降の Linux/x86 コンピュータ上で動作します。

Linux 対応の LabVIEW アプリケーションビルダには、カーネルのバージョンが 2.0.x 以降の Intel x86 プロセッサの Linux が必要です。LabVIEW は RedHat、Calderra、SuSE、Debian などの代表的な Linux オペレーティングシステムで動作します。

32 MB 以上のスワップ領域を持つ 32 MB 以上の RAM が必要です。また、インストールするコンポーネントによっては、65 MB ~ 150 MB のディスク領域が必要となります。

# LabVIEW アプリケーションビルダのインストール

---

アプリケーションビルダは、LabVIEW プロフェッショナル開発システム構成のデフォルトのインストールの一部です。アプリケーションビルダを別途購入した場合は、以下の手順を実行します。

## Windows

アプリケーションビルダをインストールするには以下の手順を実行します。



### メモ

一部のウイルス検出プログラムは、インストーラプログラムの実行を妨げる場合があります。インストールを始める前に、配布メディアのウイルスをチェックします。その後、自動ウイルスチェックをオフにして、インストーラを実行します。インストールが終了したら、もう一度ハードディスクのウイルスをチェックしてウイルスチェックをオンにします。

1. CD を挿入します。
2. setup.exe を実行します。
3. 必要に応じて LabVIEW ディレクトリを指すようにパスを変更したら、**インストール** ボタンをクリックします。

## Macintosh

アプリケーションビルダをインストールするには以下の手順を実行します。



### メモ

一部のウイルス検出プログラムは、インストーラプログラムの実行を妨げる場合があります。インストールを始める前に、配布メディアのウイルスをチェックします。その後、自動ウイルスチェックをオフにして、インストーラを実行します。インストールが終了したら、もう一度ハードディスクのウイルスをチェックしてウイルスチェックをオンにします。

1. CD を挿入します。
2. LabVIEW AppLibs Installer アイコンをダブルクリックします。
3. **Install** ボタンをクリックすると、保存先フォルダの選択が要求されます。LabVIEW フォルダを選択します。

# UNIX

HP-UX、Linux、または Sun にアプリケーションビルダをインストールするには、以下の手順を実行します。これらのライブラリのインストールにルート権限は必要ありませんが、これらのライブラリをインストールする LabVIEW への書き込みは可能である必要があります。

1. CD をマウントします。
2. オペレーティングシステムに次の UNIX コマンドを入力します。
  - **(HP-UX)**  

```
cd /cdrom/HP-UX
```

ここで、/cdrom は CD-ROM をマウントしたディレクトリです。
  - **(Linux)**  

```
cd /mnt/cdrom/linux
```

ここで、/cdrom は CD-ROM をマウントしたディレクトリです。
  - **(Solaris 2)**  

```
volcheck  
cd /cdrom/cdrom0/solaris2
```

ここで、/cdrom は CD-ROM をマウントしたディレクトリです。
3. 次のコマンドを入力してインストールプログラムを実行します。

```
./INSTALL
```
4. 画面上の手順に従います。

## アプリケーションビルダのインストールの確認

---

アプリケーションビルダをインストールしてツール » **アプリケーションまたは共有ライブラリ (DLL) を作成** を選択したら、LabVIEW を起動します。LabVIEW ディレクトリに AppLibs ディレクトリが含まれていることを確認します。このディレクトリが存在しない場合は、前述の手順に従ってアプリケーションビルダライブラリを再インストールします。

ライブラリが正しくインストールされると、examples ディレクトリには appbuild.11b のサンプルプログラムが含まれています。

# アプリケーションビルダライブラリの変更内容

---

以下のセクションでは、最新のアプリケーションビルダに加えられた変更について説明します。

## バージョン 5.1.1 とバージョン 6.0 の間の変更内容

バージョン 5.1.1 から 6.0 への移行時に変更された内容を以下に示します。

- アプリケーションビルダを使用して共有ライブラリ (DLL) を作成できるようになりました。
- **(Windows)** 3D Graph、DataSocket、および NI Report に必要なファイルは、LabVIEW ランタイムエンジンのインストールの一部になりました。インストーラを作成するときに、LabVIEW ランタイムエンジンをインストールするかどうかを選択するだけです。

## バージョン 5.1 とバージョン 5.1.1 の間の変更内容

バージョン 5.1 から 5.1.1 への移行時に変更された内容を以下に示します。

- 以前は、スクリプトファイルを作成してから、それを移動して、開こうとすると、アプリケーションビルダによってエラーが発生しました。5.1.1 では、スクリプトファイルを作成してから、ビルドスクリプトファイルを移動できます。
- アプリケーションビルダでは、名前による DLL の参照の問題が発生していました。
- アプリケーションにサポートファイルを追加する場合、**アプリケーションビルダダイアログボックスのソースファイルタブにあるディレクトリ内容を追加**ボタンを使用してディレクトリ全体の内容を追加できます。
- VI ライブラリ全体 (.lib) をサポートファイルとしてアプリケーションに追加できますが、VI ライブラリからのファイルのみを追加できます。このオプションはソースファイルタブからアクセスします。
- **ソースファイルタブ**の下のリストボックスおよび**保存先のカスタマイズ**ダイアログボックスから 1 つ以上の項目を選択できます。ファイルを簡単に削除したり、保存先の設定値を簡単に設定できます。
- インストーラの設定値を使用すると、保存先のディレクトリ内の**インストール先**や**相対パス**を設定できます。アプリケーションの実行可能ファイルをインストールできるディレクトリは、インストールディレクトリだけです。
- **VI 設定**タブ内の VI のリストはアルファベット順に並んでいます。

- **(Windows)** インストーラを作成するディレクトリを指定できます。
- **(Windows)** アプリケーションで ActiveX サーバを有効にすると、タイプライブラリが保存先ファイルリストに自動的に追加されます。タイプライブラリの作成先またはインストール先は変更できません。実行可能ファイルのバージョンはタイプライブラリのバージョンと一致する必要があるので、ActiveX サーバを有効にすると、実行可能ファイルの**既存ファイルの入れ替え**のインストーラ設定値は変更できません。

## バージョン 5.0 とバージョン 5.1 の間の変更内容

バージョン 5.0 から 5.1 への移行時に変更された内容を以下に示します。

- LabVIEW 5.1 では、アプリケーションの作成プロセスが簡単になっています。以前は、VI をライブラリに保存してから、**アプリケーションの作成**ダイアログボックスを使用してアプリケーションを作成する必要がありました。さらに、Windows でインストーラを作成するには、**配布キットを作成**ダイアログボックスを使用する必要がありました。
- LabVIEW 5.1 では、**アプリケーションの作成**ダイアログボックスを使用してこれらの操作をすべて行います。**アプリケーションの作成**ダイアログボックスのタブ内で、アプリケーションをさまざまな設定値に構成します。これらの設定値を定義したら、アプリケーションを簡単に再作成できるように設定値をスクリプトに保存します。